

---

# 世界は赤く染まっていく

終わった人間

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界は赤く染まっていく

### 【Nコード】

N4622N

### 【作者名】

終わった人間

### 【あらすじ】

世界各地に突如ゾンビが出現し、人々を襲い、仲間にしていく。主人公、人間達は生き残ることができるのだろうか。

復帰しました。1話から編集中です。

始まり（前書き）

主人公：高橋健一

9 / 2 1

改修中

2 0 1 1 / 3 / 2 5

## 始まり

とある晴れた日の朝。

健一は週に一つという少ない休日を使い、届いたパソコンのパーツの組み立てをしていた。

「えーっと・・・マザーボードはどうやってケースに取り付けるんだっけ・・・ガサゴソガサゴソ」

早くもなく遅くもないペースで作業はすすみ、組み立てを完了し、OSのインストールをして

パソコンの動作チェックをしていた所だった。

健一「自分で組むとなんか、・・・なんとというかやりとげたっていう感じがする。」

・・・と独り言をしていた健一だった。

パソコンを起動しておいて不安定にならないか見ていた。

すると外から叫び声が聞こえた。何だと思いつつ外を見ると人がヒトに追いかけられている。そして、

ヒトが人の首に噛み付いた。

「うぎゃあああああああ！！」と叫ぶ声が聞こえた。

噛み付いているヒトを見る。肌は白い。目は死んでおり、首から血が出た後がある。

まさに映画に出てくる「ゾンビ」そのものじゃないか。

「なんだこれは・・・数時間前までは変わらない日常だったのに・・・」

「あ...あ...」ゾンビの呻り声が聞こえる。

もう首を噛まれた人は生きていないだろう。そして・・・

噛まれた人が立ち上がった。噛んだゾンビと同じような目、白い肌、そう、さっきまで人だったモノがゾンビ化したのだ。一部始終を見た健一はいそいで部屋に戻り、テレビを付ける。

「・・・緊急速報です。世界各地で暴動が起き、拡大しています。速報です。暴動が起き、拡大しています・・・」

「あれってゾンビだろ。とても暴徒には見えないのだが」

「あ、とりあえず警察に電話をかけてみよう。なにか情報が得られるかもしれん。」

かけてみた。

「トウトウトウトウー」

「おいかからねえぞ！・・・どうすればいいんだ」

健一が脱出方法を考えていると、

ドンドン！ドンドン！とドアをものすごい力で叩く音がする。

「ま・・・まさかゾンビが？俺がいることがわかるのか？」

覗いてみる。顔が白く、目が死んでいる。

どうみてもゾンビです。本当にありがとうございました。

「さて・・・どうするか」

ドクンと動く心臓。健一は部屋に戻った。

箱空けに使ったカッターと台所の包丁を入手。

バンッ！

武器を持ったと同時にゾンビがドアを突き破って入ってきた。

「・・・倒すしかねえなこれは」

ゾンビがこちらを向く。目が白く濁っているというのに。ニオイでわかるのか。

走ってはこないが、ゆっくり口をあけとこちらに近づいてくる。

健一は包丁を力強く握った。ゾンビの手がこちらに伸びてくる。

健一は走り出した。ゾンビの後ろをとるためだ。

後ろをとった健一は、包丁を背中にグサリ。血が包丁につく。

「あー」

と一言発するだけで、相手には効いていないようだ。

( なら頭は？映画にでてるゾンビは頭一撃で撃沈だったよな・・・頭を狙って倒すしかない。そうしなきゃオレもあいつの仲間いりになっちまう。それはごめんだ。 )

動きがトロイゾンビの背後をもう一度とる。

「うおおおおおおお！！！！」

一撃を手にこめる。見事に頭に直撃した。

ゾンビは倒れて動かなくなった。

「ヨッシャー！」

「おっとそんなことを言ってる場合じゃないな。ここは危ない。早くどこかに逃げないと。」

そついいながら、健一は逃げる準備を始めた。



出発（前書き）

編集集中 . . . 2011 / 3 / 25

現在所持している武器

カッター x 1 包丁 x 1

所持品

リュック x 1

マイバッグ x 1

インスタント食品 x 6

缶詰 x 3 ア エリ x 6

割り箸 x 12 スプーン x 6

装着しているもの

薄いウインドブレーカー

腕時計



## 出発

「早く逃げないと。やっぱり車で逃げる。いざとなったら1・2体ゾンビをひき逃げできるし。となると表からか・・・食料積まないと。餓死して終るなんて情けない。」

缶詰や飲み物、スポーツドリンクなどインスタント食品を軽SUVの中に入るだけ詰め込んだ。そしてリュックを持つ。

表にゾンビがいないことを確認し、車に乗り込む。健一が住んでいる地域では雪が多く降り、積もりやすいのでこの車を選んだ。4輪駆動車（4WD）だ。車を発進させた。

（場所は・・・決まっていない。とりあえず中学校に行ってみよう。）  
ラジオを付けてみるが、電波を受信できないようだ。

「ラジオが全滅だとすると、テレビももうダメか・・・」

でも、中学校ってゾンビいっぱいいなそうな気がするの俺だけ？

そしたら・・・生き残ってる人達が危ない。というか生き残ってる人はいるのか？いないのか？疑問を抱えたままaccelを踏み込む。だんだんと上がるSPEED。

しかしそこで健一は思った。助けに行こうにも大量のゾンビを一人で殺れるか？という話。

外からみて判断すればいいやと思いつながらオレは車を飛ばす。

途中路上のゾンビ達がこっちに向かってくるのを見て腹が立ちひき殺そうかと

思ったがタイヤに肉塊絡まって終了になったら困るので出来るだけ轆かないようスルーした。

しかしこれはひどい。血のニオイと腐敗臭。窓を閉めていてもニオ

イがする。

あちこちに乗り捨てられている車。その中には炎上している車もあった。

障害物が多くなってきたのでSPEEDを落とす。

通常の2倍ほど時間がかかったが、やっと学校が見えてきた。

## 出発（後書き）

このページはちょこちょこ文章が追加される可能性があります。

到着（前書き）

編集 2011/3/25

えwwちょwwなんでバット持ってんのww  
バット削除

## 到着

学校前まで来た。なぜかゾンビの姿が見当たらない。

「ああ・・・これは中にいるんでしょうかね・・・」

とかいいつつ安全な場所に車を止めカッターを持ち入り口に向かった。

ガラガラガラ・・・

・・・下駄箱・・・

「なんだよこれ・・・」

ところどころに血溜りができている。

そこで固まっていると、

「あーうーあーうーあー」

ゾンビの声が聞こえる。ビビった俺はいそいで外に出る。ゾンビは外にいない。

ドアの外側からみると、1体だけだがゾンビがいる。なぜか俺に気づかず、教室に向かっていた。

足音を立てないようにして背後に付く。すでにカッターの刃は出している。問題ない。

よし・・・あとは振り下ろすだけ・・・

シュッ

バキッ

「やっば頭よええ・・・南無南無・・・」

今のところ校内のゾンビは倒した1体しか見かけていない。

「ゾンビに出会うまえに教室をみて回るか。さすがに生存者はいな

いかもしれないけど、  
武器はありそうだし。」

教室をみて回るが、役に立ちそうなのが傘とほうきしかない。まあこれでもいいか。

カサとホウキを入手。 x 1

そして1階最後の教室。掃除用具入れを開けてみる。でも置いてあるのは他の教室と同じ。

そして必要なものはないと分かりつつも、机の中をガサゴソする。ほとんどの机には筆箱やノートしか入っていないかった。でもひとつだけ違う物が入っていた。

・助けて・ と書かれたちぎられたメモ帳。  
下には・体育館の2階・の文字。

「……とりあえず筆箱の中にある書けるものをひとつの筆箱に入るだけまとめて持っていこう。」

まだ体育館には寄れない。2階と3階が残っているから。

2階へと足を進める。……どこかおかしい気がする。とても静かだ。ゾンビもないようだ。  
でも油断はしない。とりあえず近くにゾンビがいないことを確認して、

トイレにれつつゴー。実は健一、腹が弱いのである。なのでよく下痢をしている。

## トイレ（前書き）

作者は現在鬱状態ですので、文章がさらにおかしくなる可能性があります。  
ります。

2011/3/25

編集。もうすぐ更新できるかも

## トイレ

現在トイレでunk中。ゾンビはいなかった。ラッキー。どうせなので未使用のトイレットペーパーを  
できるかぎりリユックにつめる。トイレを済ませ、2階搜索。教室にはどうせなにもないので、  
図書室とコンピュータ室を見る・・・が、

「あ・・・あかない・・・」

どうやら鍵がかかっているようだ。壊すといけないと思うので仕方ない。

ので、2階の搜索を終了し、3階へ。なぜか職員室がある。

・・・職員室・・・

なぜか誰もいない。まあ車も止まっていなしい皆逃げたのだろうと思っただけ

「ウーアー」

なんかいる・・・ゾンビですね。奥にいるけど自分に気づいてるしこち来てる。

こうなったら・・・

「オリアアアア！！！」

とか叫びながらカサを投げる。それがゾンビにあたり、ゾンビは倒れた。

死んでいないので先ほど入手したホウキを使い頭に渾身の一撃を叩き込む。

ゾンビがもう動くことはなかった。そしてカサ回収。カサ丈夫だな。

・・・3階の廊下・・・

廊下に出る。なぜか職員室が3階にあるのか分からなかったが、そ



んな疑問は流し、  
体育館へ向かう。

- - - 体育館 - - -

なんなのこれ。体育館に入ろうとしたが、入り口に10匹ほどのゾンビが。多分この生徒だろう、

・ 体育館のドアを開けて欲しいらしく、叩いている。しかしこれじゃ

「俺が入れねーじゃねーか」

ゾンビ達が俺の声に反応したのか、全員こちらを向く。

「あっやべ」

そして・・・おいしくいただくとうと向かってくる。

「逃げろー!!」

そう叫びながら俺は全力疾走で1階を駆け抜けた。

ゾンビが追ってくるものの、走れないようですぐに撒いた。

「さて・・・体育館にどうやって入ったらいいだろう。入ってもゾンビがいそうだし。」

「一匹ずつおびき出して倒そうにも体力持たないし。」

「・・・! そうだ! あれが使えるそうだ!」

そして俺は音楽室へ行つた。音楽室はなぜか鍵が掛かっていない。そこでラジカセと音楽CD拝借。

目が見えないから耳がいいんじゃないかねーのかなと思つた俺。声に反応するならこれにも反応するんじゃないかな？

2階の教室へ持つていき、ベランダに置いて大音量でながす。

なんかあのおばさんみたいだけど気にしない。

2階からゾンビの様子を伺う。ゾンビはあたふたしている。

音がどこから発せられているのか目で探しているようにも見える。

「こつちだよこつち。」

ゾンビが反応する。もしかしたら階段登つて2階に来るかもしれないので反対側から降りて、

学校の入り口から監視。

そして待つこと30分。

体育館の入り口からゾンビがいなくなったのを確認して、移動開始する。

「・・・とりあえず入り口はいなくなったな。」

そして・・・体育館のドアを開ける。

トイレ(後書き)

編集集中 . . . 2011/3/25

現在所持している武器

カッター x 1    リュック x 1    ホウキ x 1    カサ x 1

現在車の中にあるもの

包丁 x 1

マイバッグ x 1

インスタント食品 x 6

缶詰 x 3    ア    エリ    x 6

割り箸 x 12    スプーン    x 6

装着しているもの

薄いウインドブレーカー

腕時計

## いざ体育館へ

ガラガラガラガ・・ドスン

ものすごい古い音がするけど開いた。

見る限り誰もいない。人間も。ゾンビも。

入ってみると結構デカイ。正面から見てステージが見える。しかし2階ってなんなのだろう。

あつ文化祭に使われるライトがおかれる場所か。

しかしどうやって上るのだろう。とか思いつつステージ裏に移動する。はしごを見つけた。

登ってみる。あっさりいけた。ん、だれがいる。

「そこに誰かいますね？返事してくださいー！」

「誰ですか？」

声が返ってきたので返す。

「メモ帳を読んだ者ですー。」

俺は彼がいるところに移動する。

「名前は？」

「石原啓二です。どうせ助けはこないと思っていましたが来てくれるとは・・・」

「石原君か。俺は高橋健一というものだ。よろしく」

「よろしく。死人は？死人ははどしました？30分前までドンドン叩く音がしていたのですが。」

「ああ、あいつらなら移動したよ。とりあえず逃げようか。」

「はい！」

入り口から出るのはアブナイので

別な入り口からでる。理由はそこから校庭にでれるからだ。

車まで走り、乗り込む。

学校から離脱（前書き）

左イヤホンはまだ死んでいない。  
中身が切れるまでは。

## 学校から離脱

・・・車の中・・・

健「シートベルトはあえてしないほうがいいかもな。」

啓二「どうしてですか？」

「この車が黒く染まり始めたら焦って外せないからな。」

「?どういう意味ですか？」

「つまり、ゾンビに囲まれたり、車が炎上したりしたら焦って脱出できなくなるって言ってるんだよ。」

「そういう意味でしたか。すみません。」

「エンジンかけてさっさと行くぞ。・・・とは行っても行くところがないんだけどね。」

車のエンジンを動かす。少しの間を置いて、健二が言った。

「ガソリンまだ残ってますか？大体こういう時にガス欠するんですよ^^;」

「あーそうだねー（棒）」とかいいつつ確認する。

「やべえガソリンがあと1目盛り切ってる。」

とりあえずガソリンスタンドへ向かうことになった。

ガソリンスタンドへの道は酷かった。所々に死体が転がっているのだ。しかも頭を貫かれ死んでいる。

「・・・この様子だと先に来ていた奴らに取られてなくなっていそうだな。残っていればいいが。」

「そうですね。」

やはり飛ばせない。歩道だけではなく、車道まで死体が転がってい

るのだ。

飛ばすとサスが逝かれてしまう。

「おっ。見えてきたぜ。」

「誰もいないみたいですね。ゾンビもいないです。」

普通なら10分程度でつくだろうスタンドまで、30分もかかった。スタンドについた俺たちはガソリンの給油が可能かどうか確認する。レギュラー・・x ハイオク・・

ハイオクを入れる。常に辺りを警戒する。変わった様子はない。

「おし、OKかな。」

置いてあった手袋を使い栓を閉じフタをする。

「本当に、俺ら以外だれもいねえな。」

「そうですね」

「んーノドが乾いた。君も飲んでいいから俺の分の飲み物を出してくれ。トランクのマイバッグにあるから。」

「はいっ！」

トランクを開け、マイバッグから飲み物を取り出す。

『なんかとてもウメエ』

水分補給のあと、健一は言った。

「水を取りに行こう。まだ水道は止まらないはずだ。」

「はい」



そういつて、彼らは車へ乗り込んだのであった。

## 再出発

エンジンをかける。「俺はまだ死んじやいない！」と思わせるほどの快音を上げエンジンは始動した。

ガソリンがともうまかつたんですね、分かります。とか思いつつ健一と啓二は自宅へ向かった。

遠距離武器なんてものは持ってないので、ゾンビがうろついてるところはできるだけ迂回する。

in 自宅

健一「着いたぜ。ここが自宅だ。」

啓二「ここが健一さんの自宅ですか・・広いですね」

「そういわれるとうれしいぜ。幸い近くにゾンは見当たらないよ。うだし、まとめるぞ。」

「わかりました。では持ち出すものを言って下さい。」

「水を車に入れられるだけ入れる。あとは菓子類や調味料。もてるならインスタント食品、ふりかけ。」

「了解です。あ、あと武器につかえそうな物は持っていったいいですか？自分なにも持ってないので。」

「分かった。たしか工具箱にハンマーがあつたはずだ。ソレを持ってけ。」

「ありがとうございます！」

啓二がまとめている間、健一はPCを使い情報収集をする。

.....

「大規模な暴動、未知のウィルスの可能性・・」

「暴動を起こしている人を見た人、『やつは生きていない。死んでるぞ』」

「暴動で交通マヒ 逃げ惑う人々」

まだニュースサイトは生きているみたいなので、準に情報を見ていく。

某掲示板を除いてみたが、たいして情報は得られず。

健一はラジオと携帯を持ち、啓二に話しかける。

「もう終わったかい？」

「終わりました。今すぐ出発できます。

「オツケー」

幸いゾンビが侵入してくることもなく、荷物をまとめて車に積んだ。

「忘れ物はないか？」

「大丈夫です」

車のエンジンをかけ、発進する。

「ところで、啓二、お前の親は？」

「・・・奴らに襲われてやつらになりました。」

「親を助けられなくて・・・ウツウツ・・・」

「泣くなよ。お前の親はお前を最後まで守ったんだろ？親の分まで生きる。わかったか？」

「はい・・・グスン」

啓二を落ち着かせるため、少し待つ。

「・・・さて、学校もダメだったわけだが、啓二、よさそうな場所はあるか？」

「はい・・・たしか別の学校ですが避難しているとのことですよ。」

「おk。場所は？」

「はい、えつとですね・・・」

俺は啓二のガイドで別の学校へ向かった。

初めての戦闘。(前書き)

ほんっつっつとつに更新放置状態。見てくれている人に申し訳ない。

今日はちよつとながめ

## 初めての戦闘。

啓二「ここを右に曲がって・・・あ、そこを左です。そしてそのまますすぐ進んで次は右です。」

啓二のガイドで第三中学校（教えてもらった）に向かう。

「ここは左で次は」 「そこで啓二の口が止まった。

左に曲がった直後、そこにいたのは

5体のゾンビだ。

しかもこちらに気づいたようで、こちらへ向かってくる。

「どうしますか!?!」

健一「戦うしかないだろ。啓二は戦いが得意か?」

「あ、はい。剣道部で剣術を習ってました。」

「じゃあやるぞ。そのハンマーじゃ扱いずらそうだから、カサをやる。俺はカッターを使うから。」

「はい。」

現在の装備

健一 武器 カッター

防具 ウィンドブレーカー

啓二 武器 カサ（スチール製）

防具 制服

エンジンを掛けたままにし、車から降りる。

しかし、車に乗っているというのに気づくというのは・・・ああ、車のエンジン音に反応したのか。

自分はカッターの刃を最大まで出し、ゾンビに向かかっていく。幸い、ゾンビ達が離れた位置にいるので、後ろに回りこむことができた。

刃が折れないように、垂直に刺す。一体目処理完了。

啓二はカサの長いリーチを利用し、前から攻撃するようだ。

一発目は手で防がれてしまっているが、すかさず2発目を繰り出し、頭にHitさせた。

2体目out。

啓二は3体目・・・に行こうとしたがさすがに読まれていたらしく、カサを掴まれた。

ゾンビの手をカサからなんとか振りほどき、素早く後ろに移動し、先端を後頭部に叩きつける。ゾンビは倒れず、よろめいた。

そこにすかさずもう一発を叩きつける。さすがに2発目は耐えられなかったようで、ゾンビは倒れた。

後2体。緊張しているせいか1体しか倒していないのに少しつかれが出てきた。

啓二は疲れていない様子だ。

健一「俺は後ろのヤツをやるからお前は前のヤツをやれ！」

「はい！」

啓二はカサでゾンビの足を狙い、転ばせる。そして頭に突き刺す。自分は転ばせるとかそういうのはできないので、

できるだけ素早くゾンビの背後に移動し、頭を切り裂く。

ゾンビ5体の処理が完了した。

初めての多人数との戦闘により2人は疲れていた。

健一「車に戻って休もう。」

啓二「賛成です・・・ふう・・・」

車のトランクから飲み物を取り出し、口にする。

飲み始めたかと思えば、気づいたら2本目に手を出していた。

健一「よし、車を出さず。ナビを頼む」

無事ゾンビの群れを突破した健一らは、車を発進させた。

走って数十分後。到着。

なんども言っているが、道路が死体だらけなので、迂回したり、スピードを落とさなければいけないのだ。

着くと酷い光景が広がっていた。

入り口にある門は何が起こったのかわからないほど破壊されていて、そこにできた大量の血溜まり。ないぞうがないだけマシか。

たぶんこの血溜まりの元は中に入っていたのだろう。

健一「よし。引き返そう。」

「えっ！？ちよちよ待ってくださいよ！もしこの血溜まりがゾンビのものだしたら、

中に生存者がいるんじゃないんですか！？」

「それもそうだな。行ってみるか・・・こわいけどな・・・」

開いたままの正面玄関から入っていく。そこら中に血溜まりがあつてやばい。



しかもいるはずの”元”がないからやばい。

教室を見て回ろうかと思っていたが、  
門以上の酷い有り様だったので、見ないことにして、2階へと登った。

2階へ登ったところで、足元に何かが落ちていることに気づいた。

けんいち は ちまみれ の さばいばる ないふ を 手に入れた！

てかなんでこんな物がここに落ちてるんだよと手持ちのハンカチで拭いていると（血に触れても感染はしない）

啓二「なんでこんな物が落ちてたんでしょね。銃刀法に違反しそうな長さですが。」

「ってなんでそんなの知ってるんだよ・・・こいつは刃渡りが15センチもあるな。」

言いながら、リュックにしまう。長いしナイフなんて扱ったことないからな。

2〜4階と体育館を搜索したが、ゾンビと生存者はいなかった。あったのは血溜まりだけだった・・・。

車に戻り、自分の家に戻る。ほんつつつとくに誰もいない。ゾンビを見かけたのはあの”学校”と

第三中学校に向かう途中の道端だったし。

皆ほかの地区に逃げたのをゾンビが追いかけていったのかもしれない。

途中コンビニにより弁当や飲み物、お菓子などを回収する。誰もいないし。  
自宅に戻る。ふつとばされてドアがない玄関から入る。籠城するな  
ら補修しないとな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4622n/>

---

世界は赤く染まっていく

2011年10月7日21時48分発行